源 流　第５８号　教育長　儘田　文雄

「はむらの道徳科授業指針」子どもの視点❸

深く考えるかいがある

子どもに「深く考えるかいがある」ことを実感させ、主体的な学習活動を促すには、どのような工夫が必要でしょうか。

本号では、子どもが「なかなか考える気にならない」授業をあえて発想することで、その要諦について考えてみたいと思います。

第一に、教材をよく読めば分かってしまう場合、子どもは深く考えることはしません。

子どもに「読んだだけでは分からない。答えは一つとは限らないようだ。」と思わせ、自由な発想を促すことが重要です。

第二に、自分の問題として捉えにくい事項であれば、子どもは深い思考を働かせようとは思わないはずです。

子ども自身が「人として生きる上で大切な問題を含んでいそうだ。」、「これまでに自分も同様の問題で悩んだことがある。」、「自分自身の課題でもある。」などと捉えることが、考える必然性を実感させることにつながります。

第三は、分かり切った、いわゆる「あるべき論」を引き出そうとする流れを予感させる授業では、考える意欲を引き出すことはできません。

子どもが「複数の考え方がありそうだ。」、「ぜひ、友達の考えも聞いてみたい。」と思える、多面的・多角的な思考を促す工夫が求められます。

時　間

詩人・劇作家・小説家・自然科学者　ゲーテ

常に時間はたっぷりある。うまく使いさえすれば。

出典：「賢人たちに学ぶ　道を開く言葉」本田季伸著（かんき出版）

※　いかに効率よく、集中してなすべきことに当たるか。時間の使い方については、万人の工夫のしどころです。